

No.25
2007.1.31

いしかわ の遺跡

古代「衣」体験イベント

古代ファッションフェスタ開催



古代ファッションフェスタは、石川県埋蔵文化財センター古代体験ひろば及び本館を会場として、平成18年9月30日(土)に開催されました。フェスタでは、来場者の方々に古代人のおしゃれについて気軽にふれられるよう「まが玉づくり」や「ガラス玉づくり」、「はたおり体験」、「草木染め」などの体験コーナーを設けるとともに、来場者からモデルを募集して「古代ファッションショー」を行いました。当日は天候に恵まれ、来場者の方々は、思い思いに古代人のおしゃれを満喫しているようでした。

財団法人 石川県埋蔵文化財センター

Ishikawa Archaeological Foundation

〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1

TEL 076-229-4477 FAX 076-229-3731

E-mail mail@ishikawa-maibun.or.jp

ホームページ <http://www.ishikawa-maibun.or.jp/>

古代体験まつり

古代体験まつりは、古代ファッションフェスタの翌日、10月1日(日)に開催されました。「古代の暮らしを味わう」をテーマに、食や生業に関わる体験コーナーを数多く設けました。また、来場者から参加者を募集して、組みひもレースやまいぶんクイズも行いました。



古代「衣」体験講座「古代のはたおり」

古代「衣」体験講座「古代のはたおり」は、埋文センター体験工房で平成18年12月10日(日)に行われました。

今回の講座では、原始機、地機、高機の3つの機を体験するとともに、地機では、4つそうこう綜統を用いたななこ斜子織りや綾織りなどに挑戦していただきました。

参加者は、4つの綜統の操作に悪戦苦闘していましたが、出来上がった模様織りに満足していただけたかと思います。



環日本海文化交流史調査研究集会

平成18年10月27日に平成18年度の環日本海文化交流史調査研究集会を開催しました。集会は平成12年度から毎年開催していて、本年度は7回目です。今回のテーマは「縄文時代の装身具 漆製品、石製品を中心として」です。

縄文時代の装身具は、社会の発展に応じて様々な製品が次々と現れています。大陸からの伝来も考えられる^{けつじょう}玦状耳飾は、県内では早～中期に作られた87点が発見されています。早期から前期の七尾市三引遺跡出土耳飾には新潟県糸魚川産の石材が見られ、早くから交流があったことが知られています。こうした調査の成果を検討し、装身具を仲立ちとした日本海域の交流を明らかにする目的で、このテーマを決めました。

研究集会は日本海に面する北海道から九州までの各地域別に、9名の方々の報告を行いました。北海道カリンバ遺跡の色鮮やかな漆製品から北部九州の特異な形状の勾玉まで、各地域の最新の研究状況が次々と明らかとなりました。装身具の種類は多く、日本海域を通して同じ製品での比較検討はできませんでしたが、地域ごとに個性豊かな装身具を発達させ、隣接する地域間での交流は行われていたようです。

最後の全体討論では、漆製装身具の多い東北日本での漆玉の展開が問題とされ、石製品で飾られる西日本での玦状耳飾の出自と発達が目玉されました。また、九州島における後期後葉からの石製品は、結晶片岩様緑色岩という石材が7割超となり、原産地の特定を含めて交流の大きな手掛かりになると、今後の研究に期待がもたれました。

翌10月28日は、資料見学会を行いました。金沢市藤江C遺跡、米泉遺跡、加賀市小杉遺跡、能美市宮竹うっしょやま遺跡、七尾市三引遺跡、大津くろだの森遺跡などから出土した貝輪、骨角製飾垂品、漆塗櫛、玦状耳飾、土製耳飾、勾玉、小玉などを観察し、地域間の異同や技法についての理解を深めました。



開会の挨拶



報告状況



討論の様子

平成18年度発掘調査から

若緑ヒラ野遺跡

若緑ヒラ野遺跡はかほく市若緑地内に所在し、かつら川に面した丘陵に立地します。この若緑周辺には奈良～平安時代の窯跡が多くあり、当時の須恵器生産地として知られています。今回の調査は県営中山間地域総合整備事業(若緑地区)の区画整理工事による市道切り下げ工事に伴うものです。

本遺跡は主に縄文時代後期～晩期の集落、奈良～平安時代の集落になります。

縄文時代の主な遺構は掘立柱建物、土坑です。掘立柱建物の柱穴内に木柱が残っていたものではなく、柱列形態は円形に回るものと、亀甲型に並ぶものを検出しました。柱が円形に回るものはいわゆる「環状木柱列」になると考えられます。環状木柱列は北陸地方を中心に分布し、縄文時代晩期を中心に短い期間存続した、地域的、期間的に限定された特徴的な建物です。他には、土坑が密集していた所もあり、たくさんの土坑で足の踏み場もありませんでした。

環状木柱列の直径は大きいもので約7mとなり、大きい柱穴は直径約1.3m、深さ1mを測る大規模なものもあります。この建物の用途は未だ確定しておらず、様々な見方があり、実用的な建物ではなく、祭祀などに使用された建物だったと考える人もいます。出土遺物は同時期の遺跡と比べると少なく、粗製土器を中心としたものでした。

奈良～平安時代の主な遺構は掘立柱建物、竪穴建物、土坑などであり、掘立柱建物は小規模なものを想定しています。須恵器を生産した工人の集落かもしれません。



上空からみた調査区(東から)



環状木柱列(東から)



奈良～平安時代の竪穴建物(西から)



土坑群完掘状況(西から)

熊坂花房砦跡

熊坂花房砦跡^{けぶそ}は加賀市熊坂町花房の東側丘陵に位置し、通称シロヤマと呼ばれています。江戸時代に書かれた地誌類によれば「熊坂領に城跡が四箇所あり」とあり、熊坂黒谷城跡^{くろたに}・口之城跡^{くちの}・菅谷砦跡^{すがたに}に当砦跡を加えた4遺跡のことを指しているものと考えられます。今回は一般国道8号改築工事南郷拡幅事業を原因として発掘調査を実施しました。

調査区は丘陵北側の尾根上に立地します。調査成果としてはまず、径15mの円墳1基の発見が挙げられます。墳丘の西側半分は後世の削平を受けて壊されていましたが、墳丘の中央で主体部が見つかり、主体部からは管玉が16点出土しました。管玉が主体部の南端で出土していることから、被葬者は頭を南に向けて埋葬されていたものと考えられます。また、墳丘の北側で周溝を検出し、付近から古墳時代前期の土師器が出土しています。



古墳検出状況(北から)



出土した管玉(西から)



出土した壺(南から)



堀切状遺構(南から)

戦国時代の砦跡との関連が注目される遺構としては、堀切状の溝や土塁状の隆起などが挙げられます。溝は尾根を斜めに走るようにして確認されており、中央には地山を削り出してできた土橋がかかっていました。土塁状の隆起も地山を削り出してつくられていました。そのほか、近世以降に削平された平坦面や尾根道、焼土坑を発見しました。尾根道は調査区内で途切れることなく、南北方向に続いていました。



土塁状遺構(南から)



大聖寺市街地を望む(南から)

平成18年度 話題の遺跡講座



平成18年11月26日(日)に、石川県立生涯学習センター3階大会議室において、話題の遺跡講座が開催されました。今回は「漆器考古学の世界」と題して、漆器文化財科学研究所所長の四柳嘉章氏に講演していただきました。

講演に先立ち、当センター整理課の安中玲美調査員より、「発掘された漆器 - 石川県を中心に - 」と題して、石川県内で出土した漆器について、縄文時代から江戸時代までの各時代の様相が報告されました。

四柳先生の講演では、科学、考古、美術工芸、歴史、民俗、植物、地理、地場産業

などさまざまな分野にまたがる視点から、漆器を分析し、人と漆の関わりや、わが国における漆文化がどう発展していったのかを、たくさんのスライドを用いつつ説明していただきました。当日は約80名の方々に参加いただきました。

平成18年度古代体験学習講座「須恵器づくり」

古代体験学習講座「須恵器づくり」は、平成18年10月22日(日)に行われました。

平成13年より毎年行われている定番の講座ですが、慣れない回転台を使った成形で粘土の機嫌を損ねている方が今年も多かったようです。それでも味のある作品が仕上がりと、焼成後の姿を想像し、みなさん自然と笑みがこぼれていました。

さて、肝心の焼成は古代体験ひろばにある復元古窯で薪を使って行います。夜を徹しての窯焚きは11月16日(木)に始まり11月18日(土)の深夜に窯を閉塞して終了です。毎年、試行錯誤を重ねながら実施していますが、昨年、やっと出土品に見られる須恵器に近づきつつあると感じられるまでになりました。ただ、今回は作品の配置が悪く途中の昇温ペースもやや速かったためか、一部の作品が割れてしまいました。自然の炎をもコントロールした先人の知恵を再認識させられました。



収蔵品ギャラリー

当センターが保管している数多くの出土品の中から、選りすぐりの「収蔵品」をご紹介します。今回は七尾城跡から出土した「金を溶かした坩堝」です。

収蔵品No.9

るつぼ 坩堝 - 七尾市 七尾城跡 -

坩堝(るつぼ)は、金属やガラスを溶かすための土製の器です。金属の精製や単に地金を溶かすためにも用いられますが、数種類の金属を混ぜて溶かすことにより合金を作ることができます。

七尾城は、能登国の守護畠山氏が築いた山城で、16世紀前半頃に築造されたと見られています。城本体は急峻な尾根筋に曲輪を設けた難攻不落の山城として有名で、山麓に広がる城下町は北陸屈指の都市として賑わっていたようです。

紹介の品は、山麓の城下町の調査で出土しました。同時に出土した土器より16世紀中頃のものと考えられます。また、出土地の付近は「鍛冶島」と呼ばれ、鑄物の製造や鍛冶や鑄物に関連する遺物が多く出土しています。

さて、この坩堝には純度80%の金(ほかには銀と銅)が付着していました。調査では金箔や金箔を貼った板、刀装具や具足の一部も出土しており、城下町では、金の生産から加工までを一貫して行っていたようです。

一見、ただの土の器ですが、戦国大名による金の確保、利用の実態に迫る貴重な資料であるといえます。「畠山文化」の基礎を支えた、活気あふれる七尾城下町の姿が今にもよみがえってくるようです。

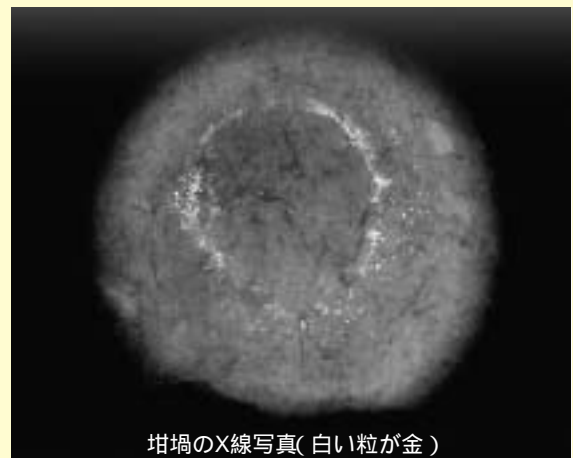
No.9



左の坩堝は直径6.5cm、高さ2.5cm



顕微鏡写真で見る金の粒



坩堝のX線写真(白い粒が金)

訪ねてみよう加賀・能登の遺跡

国指定史跡 狐山古墳

狐山古墳は、加賀市二子塚町の北方200mの水田中に立地する5世紀後半(古墳時代中期)の前方後円墳です。全長54m、前方部幅25m、後円部径29mを測り、幅10m前後の周溝も確認されました。昭和7(1932)年、土取り工事によって、後円部から凝灰岩製箱形石棺が発見され、棺内からは壮年男子の遺骨とともに、神獸鏡や銀製帯金具、玉類、甲冑、直刀、剣、鉄鏃など大量の副葬品が出土しました。また、昭和48(1973)・49(1974)年に石川県や加賀市が実施した発掘調査で、周溝から埴輪片などが出土し、同古墳の周辺に36基以上の古墳が分布することが確認されました。古墳の形態や、副葬品の種類や量から見て、当時の江沼の地を治めた強大な政治力と軍事力を備えた支配者の墓であると考えられます。なお、現在後円部は覆い屋で保護され、出土遺物の一部も併設された収蔵庫に保存されています。

最近では彼岸花の名所としても注目を集め、秋には古墳に生い茂る木々の緑のそばで、燃え立つように赤い彼岸花が咲き乱れる、幻想的な風景が楽しめます。



所在地：加賀市二子塚町
交通：JR北陸本線動橋駅から車で7分
お問い合わせ：加賀市教育委員会教育総務課
電話 0761-72-7970

平成19年度まいぶん友の会会員募集中

まいぶん友の会は、有料(年額1,000円)の会員制情報提供サービスです。会員になると、各種「まいぶん情報」のお届けや、会員向けの説明会に参加いただけます。

詳しくはホームページいしかわの遺跡 <http://www.ishikawa-maibun.or.jp/> もしくはチラシにてご確認ください。

お申し込み・お問い合わせは (財)石川県埋蔵文化財センター (TEL 076-229-4477)まで